令和３年７月２０日

石田波郷の句碑を巡る②　～波郷の生家～

校長　　玉井　啓二

本年度は、松山市内に数基設置されている、本校の卒業生で昭和を代表する俳人の石田波郷の句碑を巡り、そこに記されている波郷の俳句を鑑賞しています。今回はその第２回目で、西垣生町の波郷の生家に設置されている句碑を紹介します。（第１回目については、本校のホームページの「校長室より」に掲載しています。そちらを御覧ください。）

右の写真の句碑は、本校のすぐ北側に位置する波郷の生家（現在は、生家を生かした古民家カフェになっています。）の庭に設置されています。以前は、波郷の長兄である石田和弘氏邸に設置されていましたが、それが移設されたものです。この句碑に記されているのが、波郷の初期の代表作とされる次の俳句です。

朝顔の紺の彼方の月日かな　　石田波郷
（あさがお　こん　かなた　つきひ）

この俳句の季語は「朝顔」。朝顔は真夏に咲くイメージが強いのですが、秋の季語です。この句は、1942 年（昭和 17 年）に詠まれています。

鑑賞の前に、この句が詠まれる前後の波郷の経歴や時代状況を確認してみましょう。この句が詠まれる前年の 1941 年（昭和 16 年）12 月８日に太平洋戦争が始まりました。翌年にこの句が詠まれていて、波郷はこの 1942 年（昭和 17 年）６月に結婚しています。〈結婚はしたが職無くひたすら俳句に没頭し、鶴に全力を挙げた。韻文俳句を大いに興そうとした時期であった〉との自句自解も残されています。（「鶴」は、波郷が創刊した句誌で、主宰になっています。）また、この年には、波郷の弟・長則が出征しています。波郷が出征する 1943 年（昭和 18 年）の前年のことです。

この俳句からは、波郷が朝顔の鮮やかな紺色を眺めながら、その向こうの歳月を思っている様子がうかがえます。この時の歳月とは、未来のことなのか、あるいは過去のことなのか、それは読み手に委ねられます。ですから、「この句を詠んだ時の波郷は 29 歳で、俳句に全てをかけようと意欲と熱意に満ち溢れている時期だから、洋々たる未来を思っているはずだ。」という未来派の人もいます。一方で、「この句を詠んだ時は戦時色が濃くなっていて、当時の政府は文芸に対して厳しく弾圧するようになっていた。弟は出征し、明日は波郷自身が召集されるかもしれない。そのような中で、昔と変わらない朝顔の紺色を通して、昔のよい時代を懐かしんでいるのだ。」という過去派の人もいます。これらを踏まえて私は、「波郷は目の前の朝顔の紺色を見ながら、西垣生で幼少期を過ごした時に見た朝顔を思い出し、句作に励んでいたことなどの様々な出来事を思い出している。そして、現在は未来への夢や希望を描くことが難しい戦時下にあるが、朝顔の紺色がずっと変わらないように、昔と変わらない平和で穏やかな未来で句作に専念したいとの願いを込めている。」というような解釈をしています。過去・現在・未来派といったところです。

ところで、この句の中で「月日かな」と時間を詠んでいますが、このことは画期的なことではないかと私は受け止めています。というのも、近代俳句は「目の前の事物事象の瞬間をありのままに表す」という写生を重視していましたから、当時の俳句では季語が時間の移ろいを醸し出すことはあるにしても、過去・現在・未来という時間を直接的に取り入れることは難しかったように思われるからです。そのような発想すらあまりなかったかもしれません。しかしながら、意思や想像といった人間の意識は、時間や空間をやすやすと、いとも簡単に飛び越えてしまいます。それは人間の本質的なことです。したがって、波郷のこの句は、写生の制約やしがらみを突破して、人間本来の在り方をごく自然に表したものと言えるでしょう。

【参考】俳句の聖地「愛媛・松山」へ吟行をいざなうサイト｜五・七・五のこころ旅　吟行ナビえひめ